

池谷家蔵『島わたり』絵巻翻刻

今橋 萌・河合 恵・小関あかり・齊藤探花・
佐々木 泉・笹村 愛・鈴木 彰

はじめに

ここに翻刻するのは、横浜市内の旧家、池谷家いけのやに伝えられてきた、お伽草子『御曹子島渡』の一伝本である『島わたり』絵巻（以下、池谷家本と略称）である。

池谷家本は近世前期写の絵巻で、三巻三軸からなる。糊が剥がれた状態で保管されていたものを、近年、卷子本として仕立て直したという。後補された紺表紙には、原装の朱題簽が貼られ、「嶋わたり 上（中・下）」と墨書されている（中巻は「嶋」の部分が破損）。内題はない。料紙は鳥の子紙で、金泥の下絵が施されている。本文は漢字平仮名交じり。寸法は、上巻表紙が縦三三・一糎×横三六・一糎、本紙総長一一九九・二糎、中巻表紙が縦三三・一糎×横三六・〇糎、本紙総長八六〇・二糎、下巻表紙が縦三三・一糎×横三四・〇糎、本紙総長一四三〇・二糎である。なお、下巻末尾には、「武州橋郡綱島村鎮守諏訪大明神御宝前奉詠等遠近求景之狂歌」と題する狂歌等が記された料紙二紙が張り継

がれているが、絵巻とは内容的には無関係である。そのため、今回は当該部分については翻刻の対象とはせず、また前掲した下巻の寸法（本紙総長）にも含めていない。

池谷家本は、二〇一二年五月二十九日に放映されたテレビ番組「開運！なんでも鑑定団」で紹介され、世に知られるところとなった。その後、石川透氏が同本について、

この絵巻は、九曜文庫本として、『奈良絵本絵巻集』一一（早稲田大学出版部、一九八八年九月）に三巻中一巻のみの零本として紹介された絵巻と酷似しており、おそらくはほぼ同時に制作されたことが明らかである。／その制作時期は、江戸時代前期と考えられる。……

という指摘をしているが、まだ本格的な検討の対象とされたことはない。¹⁾

従来、『御曹子島渡』については次のような伝本の存在が知られていた。²⁾

(一)①古粹堂文庫本 絵巻。大二軸。

②九曜文庫本 絵巻。一軸（下巻のみ存）。

③池谷家本 絵巻。大三軸。

(口)④赤木文庫旧蔵本 絵巻。大二軸。

⑤九州大学附属図書館支子文庫本 絵巻。二軸。

(ハ)⑥山田平十郎旧蔵本 奈良絵本。特大三冊。

(ニ)⑦〔江戸前期〕刊丹緑絵入本 横本。二巻。上欠。

⑧御伽文庫本

⑨赤木文庫旧蔵「文鳳堂雜纂」所収本。

(二)⑩秋田県立図書館本 絵巻。大一軸。

(三)⑪赤木文庫旧蔵本 絵巻。大一軸。

また、断簡としては、以下の三点の存在が紹介されている。

⑫石川透氏蔵本 A 奈良絵本。横本。断簡、一枚。

⑬石川透氏蔵本 B 奈良絵本。横本。断簡、一枚。

⑭石川透氏蔵本 C 奈良絵本。横本。断簡、十二枚。

こうした中で、池谷家本は、当初から三巻本として制作された絵巻であるという点で特徴的といえる。なお、近時、『思文閣古書資料目録』第二五四号（二〇一七年七月）には、同じく三巻三軸からなる「奈良絵巻 御曹子島渡り」が掲載された。これらの伝本が俯瞰されることで、『御曹子島渡り』の展開と伝播の様相の解明が進むことが大いに期待される。

ここで、池谷家本の翻刻紹介に至る経緯を少しく記しておきたい。

鈴木は、池谷家の先代のご当主と親しい知人関係にあった方のご教示によって、二〇一二年九月にこの絵巻の所蔵先を知ることとなった。その後、しばしの時を経て、二〇一六年一月、現在のご当主とお会いすることができ、閲覧の機会を与えていただいた。

その折、有志の学生とともに当該絵巻の分析を進めることをお認めいただき、最終的には同家に向けた報告会を開くことをお約束した。同年四月より、当時文学部文学科日本文学専修三年生であった今橋・河合・齊藤・笹村の四名と研究会（島わたり研究会）を開始し、六月からは、同二年生であった小関・佐々木の兩名も加わった。そして、二〇一七年七月に至るまで全十六回に及んだ検討会を通じて、翻刻と釈文の作成、現代語訳の作成、本文と挿絵の分析に取り組んだ。

ところで、池谷家本は横浜開港資料館に寄託されていた時期があり、同館から問い合わせを受けた国文学研究資料館の齋藤真麻理氏が、二〇〇九年に現状調査を行っていた。齋藤氏は、国文研の事業との関係からあらためてこの絵巻に着目し、デジタル画像公開を含めた本格的な紹介へ向けて池谷家との交渉を開始したところで私どもの活動を耳にされ、二〇一七年三月に鈴木にご連絡をくださった。そして、学生たちの成果発表の機会として、翻刻紹介することを勧めてくださったのであった。私どもの研究会はあくまでも池谷家への報告会を目標としたものであったが、そのとき以来、新たな目標が加わることとなり、本稿を取りまとめるに至ったのである。

なお、池谷家本は二〇一七年末から国文学研究資料館のHPでデジタルカラー画像として閲覧可能となっており（コレクション名「いけのや文庫」、齋藤氏による関連論稿が二〇一七年度内に公刊されることにもなっている。書誌情報等の詳細については、そちらをご参照いただきたい。また、紙幅の関係もあり、本文系統の検討や挿絵の問題など、池谷家本の分析については、齋藤氏

の論稿を踏まえて、続稿にて行うこととしたい。

注

(1) 石川透「〈研究ノート〉『御曹子島渡』の伝本について」(『文学・語学』二〇八・二〇一四・三)。他に、石川透「御曹子島渡」裸島絵二種」(『奈良絵本・絵巻研究』十二〇一二・九)も関連。

(2) 松本隆信「増訂室町時代物語現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二・八)を基盤とし、情報を補った。

(3) 池谷家本の現状は修復・改装後のものだが、各巻巻頭第一紙では、冒頭部に余白を確保し、巻頭を意識した書き出しとなっていることからみて、元来三巻三軸の形で制作されたと考えてよいだろう。

(4) これらの他、齋藤真麻理氏は、国際共同研究「境界をめぐる文学——知のプラットフォーム構築をめざして——」第4回研究会口頭発表(二〇一七年六月十七日 於国文学研究資料館)において、兵庫県立歴史博物館蔵の奈良絵本(横本一冊)の存在にも言及している。

翻刻

〔凡例〕

- 一、底本は池谷家蔵『島わたり』絵巻(三巻三軸)である。
- 一、底本にできるだけ忠実な翻刻本文の作成を期した。ただし、漢字・仮名の表記は現行の字体に改めた。
- 一、濁点は底本に付されているもののみ示した。

- 一、改行は底本の通りとした。
- 一、ミセケチは当該文字の左に「ヒ」を付して示した。
- 一、挿絵の位置は、各巻ごとに通し番号を付して(絵1)〔絵2〕のように示した。
- 一、翻刻本文作成の分担は次の通りである。

- 鈴木……上巻・第1紙〜第15紙、下巻・第15紙〜第24紙
- 笹村……上巻・第16紙〜第27紙
- 齊藤……中巻・第1紙〜第9紙
- 河合……中巻・第10〜19紙
- 今橋……下巻・第1紙〜第14紙
- 佐々木……下巻・第25紙〜第29紙
- 小関……下巻・第30紙

〔上巻〕

さるほどに御さうしはひてひらをめされ
みやこへのほるへきやうをとせ給へはひ
てひらうけたまはり日本国は神国に
てましませはもの、ふのてからはかりに
てはなにかたく候これよりもほくしう
に一のくにありち島ともゑぞかし
まとも申そのうちにきけんしやうのみ
やこありそのわうの名をはかねひら大
わうとそ申けるかの大りに一のまきも
のありその名は大日のほうと申て

ありかたき事なりされはげんせにてはきのほう後世にては仏道の法なり

この兵法をおこなひ給ふ物ならば日本国は君の御まゝたるへし何とぞ御てうほうありて御らんし候へかすと申せは

〔絵1〕

御さうしこのよしきこしめしとやせ

むかくやあらんとおほしめしてしはしは物をもの給はて御入ありしかしよせんた、かの島へわたらはやとおほしめしひてひらにいとまこひをめされつゝ、たひのいてたちし給ひてをとにきこえし

日かすなれとも廿五日と申には我朝四こくなる土佐のみなとにつき給ふせんとうをちかつけていかにこれはいつくへ行舟そ数はいかほとあるそと、はせ

給へはせんとうはうけたまはりこれはほつこくあるひはたうかいたうあるひはかうらいこくの舟も御入あると申せは御さうしはきこしめしめいせんはいかほと、と

はせ給へはせんとうはうけ給り舟のかすは一

千そうと申その中に七そうさふらふ其中に浪くゝりはや風いははり浪わたし岩く

「第1紙

「第2・3紙

たきとてあまた待ると申ける

〔絵2〕

御さうしはきこしめしよのふねはほし

からすはや風とこのませ給ひこかね百両にかいと給ひて御さふねとかうしじんしやうにかさりこしらへへにはくら

まの大ひたもんでんともにはうち神正八まんろかいは廿五のほさつをかき

たてまつりいはひくはんじやう申ひとへにたのみたてまつるよしきせいありてとさのみなとをこぎ出しさらは

ばんりへをしいたすうしほをむすひててうづとし日本の神とおかみ給ひて

かみはぼんでんたいしやく下は四大てんわう地じんけんらうべつして神明

くまの、三所大ごんけんうせいむせい大小の神祇うみには下界のりうじんしほ

かま六しやねかはくはちしまへわたしてたひ給へ大じ大ひときねんありて

風にまかせて行ほとにとをるところはど

こししまつしまうし人しまをかのし

まとら島まつまい島かふどしまゆみ

「第4紙

「第5紙

「第6紙

しまたけ島もろかしまいわう島きか
いか島けんかいか島ひるか島たての島
をあけぬくれぬと行ほとに七十五日と
申にけうがるしまにつき給ふなぎさ
へよりみ給へはたかさ十ちやうはかりなる
もの二三十人いてきたりしかこしよ
りうへはむまにてありこしより下は
人なりしかこしのあたりを見給へは
たいこをつけてあなたこなたとしける
を御さうし御らんしてあまりの
ことのふしんさにことはをかけて見は
やとおほしめしいかに島人たちこのし
まの名はなにといふやらんとの給へは
しま人このよしうけたまはりこれはわせ
ん島と申てかくれなきむま人しま
とはこの所なりと申御さうしはきこ
しめしめんく／＼にこしにつけたる物
はなにそと、ひ給へはこれは太こと申
物なりと申御さうしなのために
つけけるそと、はせ給へは島人こたへ
ていはくわれらかあまりせいのかかくし
てもしころひてあれはをきあかること
ならずさけへとこゑきこえさるととき
このたいこをうちしようこそ申ける

「第8紙

〔絵3〕

もつともと仰られてはしかほと物
かたりし給へしかとうりうしてもせ
むなしとてかいしやうへ御さふねをい
たし風にまかせて行ほとに八十よ
日と申には又あるしまへつきたまふ
なぎさへよせて見たまへはなんし女子
のへたてはしらす三十人はかりはたかにて
るたりしを御らんしていかにやし
ま
人にたつね申たき事有と仰られけ
れは島人何事そと申このしまの名
をはなにといふそときこえければさん
候この島はかしまと申てかくれもなき
はたか島と申なりとありしかは御
さうしきこしめしこれは神のちかひ
かなにとて物をはきぬそと仰られけ
れはかみのちかひにてもなした、此
島のならひにてきさると申せは御
さうしきこしめしかくなん

「第9・10紙

「第11紙

風ふけはさむくはなきかはたか島
あさの衣を身にもまとはす
となかめ給へは島人返歌
風ふけはさむくはあれとはたか島
あさの衣のやうをしらねは

と申ければ御さうしきこしめしかく
てはかなふましあさの衣をまいらすへし
き給へとありしかはしま人うけたま
はりなのめならずよこふことかきり
なしさて御さうしはみなみにむかひ
三十六くはんめにしやうくはんのさたと
申まき物のその中にはこひのゑん
と申をおこなひ給ひて三とまねき
給へはこんちの上ほん七十七ん船中に
みえたりすなはちこれをしま人に
つかはされければよろこふ事かきりな
しいかに申さん島人たちこれよりゑ
そか島のきせんじやうのみやこへはいか
ほと船路そと、はせ給へは島人う
けたまはりかねひら大わうのみやこ
ならばこれよりじゆん風よくして三
年三月也あしくしては七年にも
わたると申ければ御さうしきこし
めしかなたこなたの島くへわたり
てしんらうせしよりこの島よりも
とらんかいか、あらんとあんしかねて
そおはしける島人はこの島に御と、
まりあれと申さるほどに御さうしは
あさの衣をとりいたさせたまひて島
人にたひければよろこふ事かきりな

「第12紙

くそれよりまつたいのてうほうになり
物をきることのはしまると申也

〔絵4〕

さるほどに御さうしはあんしかねて
そおはしけるかまへてしはし我心この
ま、もとるものならばひてひらにな
にといふへきやうもなしみかきられ
申へきことれきせんなりとおほし
めしまたおもひきり給ひて御坐
ふねをおしいたしさらは万里へこき
いたす日数つもりてまたあるしまへ
七十二日と申につき給ふなきさによ
せて見給へはとしのほと四十はかりを
はしめとして十七八なるものもあり
女こ三百人いてあひて御さうしをと
りこめてしまのまほりこそきたれ
とてあらうれしやとよろこひてすて
にきらんと申けりさるほどに御
さうし仰けるはしま人たちまつ物
をいはせてきけとありければそれには
とりあひ申さすしておのれらたか
ひにいふやうは三百年かそのさきに
日本あしはらくよりおとこ二人き

「第13紙

「第14・15紙

「第16紙

たりしおさへてきりてしま人のま
ほりにし給へはそれより鳥かふつき
して思ふまゝなりみなくよりて
きりとりてまほりにかけんとて
まほりかたなをぬきてもちてよるこ
ひかゝりける御さうし御らんしておそ
ろしのありさまやと心ほそくもお
ほしめしいまをかきりのことなればす
こしのいとまをたひ給へおもしろき
竹をならしてきかせ申さんとしてたい
とうまるをぬきいたしかんくしやう
さく中六下九とて八のうたくちに
花のつゆをふきしめしときのてうし
をとりわうしきにてふき給ふがくに
とりてはどれくそあふちうかんしゆさ
うふれんといふかくをふき給へは女と
もこれをきゝおもしろしくはんき
よしままほりにしたけれとも竹を
ならすかおもしろさにしはしゆるし申
さんとてまほりかたなをさやにさし
笛をこそはきゝにけれ

「第17紙

「第18紙

「絵5」

「第19・20紙

さるほどに御さうしはたはかりたると

おほしめしさてそのあひくゝに物
かたりをそしたまひけるこれよりひの
もとあしはらくくよりむくりたいち
のために十万よきのつはものをそろへ
てわたる也これを取り給ふへし我ら
をきり給ひてすこしつゝまほりに
かけんよりもおとこ一人つゝままとさた
めてもち給へ十万よきの人数はわれ
われかまゝにてさふらふほとにいかてき
かへりてわたさんと仰ければ島の女は
よろこひてうちくつろきてそかたりける
このしまはかくれなきにようごの島と
はこのことなりと申ければ御さうしき
こしめし女人はかりにて和合のかた
らひをなしたねをはつくそとゝひ
給へはされはこそとよこれよりみなみ
にあたりてなんしうといふくにあり
そのかたより吹くる風をはなんふうと
申みなみのなんとほしのなんとをとり
あつめふきくる風をふくみてさい
あひとなる也又うまるゝも女にてかや
うにおほき也と申御さうしはきこし
めしやかておとこをえさせ申へしとて
いとまこひしてたはかりすまし御さ
ふねををしいたす風にまかせて行

「第21紙

給ふほとに三十日と申には又あるしまへ
つき給ふなきさへよせてみ給へはせい
のたかさは一しやく二すんあふきのた
けほとの人三十人はかりいてきたりた
り御さうし御らんしてこのしまの
名をはなにといふそととはせ給へは
しま人まなこにかとをたてなにをいふ
そやくはんきよそか島にかくれなき
ちいさこしまとはこの事也ぼさつし
まとも申なり

「絵6」

ちいさこしまのいはれと申をかたつて
きかすへしあまりにせいちいさく
してそれにつけてそ申けるまたほ
さつ島とは夜三とひる三となんほう
ふたらくせかいより廿五のほさつた
ち十二のきかくをそうしつゝくはんけ
むをめされてやうかうなりいきやう
くんし花ふりしうんたちてしゆせ
うなりしかるゆへにこの島をほさつ
島とは申なり人のしゆみやうもなかく
して八百までいけるなりとそ申
ける御さうしきこしめしさては

「第22紙

「第23紙

ほさつのましますか一日なりともと
うりうしおかまはやとおほしめしけ
れはあんのことくふたらくせかいよ
り廿五のほさつやうかうならせ給
ひてくはんけんおんかくし給ひて心

「第24紙

もことはもおよはれすほけきやうに
とかれたりらうりくときあんをんらく
ときく時はありかたし三ほんしやう
しやうのこくらくせかいとはうたかひな
しとおほしつゝすいきのなみたをな
かし給ふありかたくはおもへともこゝに
心をとめてもせんなしとてまた御
ふねをおしいたし風にまかせて行
給ふあけぬくれぬとせしほとに九十
五日と申にまたふしきの島につき
給ふなきさへよせて見たまへはとしの
ほと四十はかりをはしめとし三十三人
いてたりしか御さうしをつくくゝと
みたてまつり、よこてをはたとうちあ
らうれしやけふのゑしきがきたる
とててんくはのはうにぶすやをはけて
中にとりこめければかれらかせいにはか
に七八丈にたかくなり三めん六ひのかた
ちをげんし十二のつのをふりたて
すてにくはんとしければいたはしや御

さうしはすてに御いのちあやうかり

「第25紙

ける有様也あさましやかゝるうきめにあ
ふ事も前世のいんぐはめぐりきてかゝること

の心ほそくおはせしかされ共心を取

なをし鬼共に仰られけるやうはすこしの

いとまをたひ給へ竹をならしてきかせ

申さんと有ければすこしくつろげ

たてまつるそのひまにたいとう丸を取

いたしねとりすまし給ひてまんじゆ

らくといふかくをしはしふかせ給へは

「第26紙

【中巻】

さるほどにおにともこれをきくよりも

竹をならすかおもしろきにかほとも

ならせとてみなくしつまりて笛を

きゝてそあたりける御さうしは御覽

して物かたりをしかけ給ひけるさて

この鳥の名をはなにと申やらんとあり

しかはおにともこれをきゝゑそかし

まとてかくれなきむくりかすむしま

なりと申せは御さうしきこしめし

これよりきけんしやうのみやこへはいか

ほどあるそとゝはせ給へはおにとも

けたまはりされはてんちくへ行には

大河あまたあり一つにははつたい河二

にはさくら川三にはきくすい川四には

やうき川五にはごんが川とてひろさも

一万ゆしゆんふかさも一まんゆじゆん

にてこれへおちあひあつまる水の

そこより大風ふきしら浪たちて水

のはやき事はみつばのそやをいるかこ

とし水のつめたきことは日本あしは

らくのかんこほりを百あはせたるより

もなをつめたしこれよりみやこへはじ

ゆんふうよくしては七十五日あしければ

いかゝともはからひかたしおなしくは

たゝよのつねの舟路ならすしんらうし

給はんよりすめはいつくもみやこなり

これにとゝまり給ひて竹をならして

きかせよいのちをたすくうへなれば

われらにをそれきつかいすなど申け

れは御さうしはきこしめしとゝまる

へきにもあらずとていとまこひをし

給へはしま人いろくゝとゝめ申けるほ

とに十日はかりはやすみ給ひてそのひ

まに御舟を川へいれてあんないのみ

給ふにいかにしてもわたるへきやう

さらになし御さうしはこりをとりしゆ

ずさらくゝとをしもみてなむや上は

ぼんでん四たい天わうけんらう地神

「第1紙

「第2紙

ゑんまほうわうりん月りんほしの
かみへつしてはきふねきたの、てん
神まつ尾ことにはうち神正八まん
うせいむせい大小の神祇みやうだうを
おしおとろかし奉るねかはくはしまへ
なんなくわたしてたひ給へときねんを
ふかく申つゝろかいかちをたてなをし
風にまかせてふかれ行風よくして
三十五日じゆんふうあしくては七十五日
のふなぢなれともまことにきせいの
しるしにや三日ひなかと申にはむか
ひの地にはやつきぬおとにき、ぬる
きけんしやうのみやこにのほり給ひ
大りのうちをみてあれは心にもこと
はにもをよはれす地より三里たかく
八十ちやうのくろかねのついちをつき
天にはくろかねのあみをはり六十ち
やうのくろかねのさくをふりおなしく
とひらをたてさせ給ひ二十ちやうに
こかねのついちをつかせおなしくし
やく木おなしく戸ひらをたてさせ
せたりさるほとに御さうしはこ、かし
ここにたゝすみて見給へはめんづこんづ
あはうらせつたくせいみやうしゆゑし
やうきとておにともか千人はかりあつまり

「第3紙

てにはのさうしをしたりしか御さう
しをみつけてよこ手をはたとうちあ
らうれしやけふのゑしきかきたりた
るそといふまゝ、に中にとりこめてく
はんとこそはしたりけれ

「絵1」

かれらかせいを見給へは十七八丈に見
えたりけり十二のつのをふりたて、
かすみのいきをつきかけてちやうやの
やみとそなりにけり御さうし御らんし
て日本にてあるならば十万よきかき
たるとも物とはせしとおもへともそれは
おもふにかひもなしとやせんかくやあら
しとおもひまはせと小車のやるかたさ
らになかりけりせめての名残とおほし
めしすこしのいとまをこひ給ひかの
たいとうまるをとりいたしにしきの
ゆたん引はつしかんこしやうさくちう
六下九とて八のうたくちにはなの露に
てうちしめし時のてうしをとりあはせ
わうしきにてあふちうかんしゆさうふ
れんまんしゆらくじゆみやうりうや
こんらくといふがくをいまそかきりとふ

「第4紙

「第5紙

き給へはあはうらせつはこれを見き、ゑしきとはしたけれと竹をならすか
おもしろければはしゆるして竹を
ふきてきかんとてかすみのいきをひきけ
れはもとのそらにそはれにける御さ
うしは時のいのちをたすかりてこ、を
せんと、ふき給へはあまりのおもしろ
ろさにいさやならひてふかんとて竹
をもとめてあなをあげふきてみれと
もならされはた、くはんきよかふくほ
とおもしろき事よもあらしとて東
西をしつめてき、にけり

「第6紙

「絵2」

あるおにともかいふやうはこれほどお
もしろき事を我らはかりかきかんよ
りいさや大わうさまへいはんとそ申ける
のこりのおにともつともしかるへし
とてそうもん申ければ大わうきこしめ
しいかなることそ御らんし候はんとて
八十二けんのひろえんまでよひ給ひけ
れはやかて御まいりある大わういてさ
せ給ふ御すかたを見たてまつれば五
色をしゃうしいてたちて十六ちやう

「第7紙

「第8・9紙

のせいにて手あしは三十六つのは三十
ありてよばはるこゑは百りかあひだ
ひ、きさ、やく声は十り聞えきも玉
しあもきえ入はかり也大のまなこにかと
をたて日本あしはらくよりわたり
たるくはんきよとはあれかとの給へはま
なこは朝日のか、やくことく也竹とやらんを
ならずとは汝か事かふけきかんといひし
有様おそろしきことかきりなしもとよ
り思ひまうけ給ふうへたいとう丸取出し
錦のゆたん引はづしねとりすまし給ひ
がくはしなく、おほけれ共天竺にてはし、と
りへいとりとふらてんとかやりんせいさう
ふれんしゆみやうわうにちはんらくそ
よやげいしやうういのきよくと申せし
をこ、をせんと、ふかせ給ふ

「第10紙

「第11紙

「絵3」

「第12紙

「絵4」

「第13・14紙

大わうつくくとき、給ひなのめなら
すよろこひてくはんきよはよきにこ
れまでわたりたる三百年かそのさ
きにあしはらくよりわたりたち

まち道にていのちをうしなひける
とかやさても御身はなんなふこれまで
わたり給ふことこそありかたけれのそ
みありてきたり給ふかかくさす申せと
ありしかは御さうしきこしめしさん
候おそれかましきことなれともこの内
裏に大日の兵法御さ候よしうけた
まはりてあるあひた御なさけの御でし
にせさせ御つたへありてたひ給へかし
とのたまへは大わうきこしめしてあら
やさしやくはんきよさやうのこゝろさ
しにてなんなくこれまできたるぞ
やしていしうく父子ふしふは三世の
きえんとうけたまはるでしにならんと
てきたることけふのゑしきにしたけ
れともしていのけいやくとなのるうへ七
生のちきりにてなるといふ一字千
金とうけたまはるこれによりてし
しやうのおんは七百さいととかれたりさる
ほどに御身わたりて川のおんないし
りたるらんその川をはかんふう川と申也
水のそこより大風吹しら浪たちあ
しはらくこのこほり百あはせたるより
もつめたかるへしその川にてあしたにも
三百三十三度ひるも三百三十三と六百

「第15紙

六十六とのこりをとり三年三月しやう
しんをして八月十五日に一とならふ
大事也あしはらくこの大天狗太良坊
もわかでし也四十二くはんのまきもの
をさうてんせしと申せしかやうく廿
一くはんいのほうまでをこなひてそれよ
りすゑはならはぬ也もしそれをなら
いてばしあるらんそれをならひてある
ならばそこにてことくかたるへし一
しおつるものならはけふのゑしきと
なすへきなりとおほせられければ御
さうしはきこしめしもとよりく
らまそたちのことなればひしやもん
のけしんもんじゆほさつのさいたんに
てもんじにさういましませす
とらのまき物よりひもとき四十二巻
し給へるまきものをことくをこ
なひ給へは大わうきこしめしてだ
うりに御身これまでなんなふきた
りたりこのうへはさらはゆるし申さん
とりんしゆのほうにかすみのほうこ
たかのほうきりのほうを御つたへあり
これよりのちはむようなりとてぎ
しきをた、せ給ひけり

「第17紙

「第16紙

〔絵5〕

御さうしはた、ひとりひろにはにおはしましとやせんかくやあらましとしはしそこにたゝすみ給ふ大わうゑしやきを御つかいにていかにやあしはら国のはんきよはいづくにあるそ見て参れと有しかはゑしやきはうけたまはりひろえんさして出ければもとの所に有けるをよくく見奉りてかへりける

「第18紙

「第19紙

【下巻】
さるほどに大わうにかくと申ければ大わうきこしめしさてはふしぎのものかなさらは出てさかもりせん竹をもならさせきかんとて今度はすかたを引かへていてんとおほせありてあはうらせつを千人はかりひきぐしていでさせ給ふ大わうの御いてたちにはとしのよはひ四十はかりのおとこにいてたちたまひてゑほしじやうゑをひきつくろひ三てうかさねのたゝみの中ほとにむすとなをり給ひ御さうしを御覽してゆんでのかたへよびよせてなをらせ給ひけるまへみしおもかけかわ

「第1紙

すられすおそろしきことかきりなしされとも御さかつきはしめ給ひくはんきよは竹をならせと仰ければ御さうしはきこしめしたいうまるをぬきいたしねとりすまし給ひつゝ、はいくはいかくといふかくをふかせ給へは大わうきこしめしおもしろいそやくはんきよはいくはいかくといふがくはさかつきをめくらすとかきたりさらはさかつきをめくらすとてじゆんきやくなりとさすほとにさけもなかはとみえしかは大わうあふぎとりなをしにしきののうれんをかきあけて朝ひてんによはさくかよあしはらこくのくはんきよか竹をならすかおもしろければ出てきけやとのたまへは天女いつましきものとはおほせともちゝの仰にてありければいはやとおほしめしいてたち給ふ御しやうそくしめまきそめのはなやかなるからまきそめのきくかさねにむらさきかさねこのはかさねやへかさねからあやをりて一かさね十二ひとへを引かさねからあやをりて一かさね十二ひとへをひきかさねて天女におとらぬ女房たち十二人ひきくしておもひくにい

「第2紙

てたちてきぬのつまとり七への屏

風八重のみす九へのまんきちやう

十二のきかくのその中をいてさせ給ふ

ありさまを物によく／＼たとふれば

十五夜の月の山のはをほの／＼といつる御

すかたまたませのうちのやへきくひ

とへ桜にやへさくらたいふれいの梅の花

ぼたんの花のこつくなるかいてさせ給ひて

ち、大わうのめてのわきになをらせ

給ふ御すかたをみたてまつればとつ

にせんたんあるにせんたんならひはせん

たんわくふにせんたんうつにせんたん

ひくにせんたん三十四さう六十しこう

一万たんのかたちをもち給ひたるてん

により御さうしは御らんしてたとひ

いのちはとらるゝとも一夜なれそひて

こそなが／＼のしんらうをもわするへき

とこ、ろか雲井にあくかれてかくは

さま／＼おほけれとなんしは女子を

しのふがく女人かなんしをこふるがく

し、とらてんといふかくをふかせ給へは

てん女はこれをき、かためこれはくはん

きよかみつからに心をかくるよあらや

さしやとおほしめしけるさるほとに

大わうはおもしろいそよくはんきよあ

「第3紙

の天女と申はこぞの三月に母にはなれ
てきうくつのふることもなし竹をな
らしてきかせなくさめよと仰ければ

〔絵1〕

「第5・6紙

しゆもなかはに大わうは御ざしき
をたち給ふてん女もともに入／＼
もみなうちつれてたちたまふ御さ
うしもをくればあしかるへきとし
たひてゆかせたまふ一日二日とおも
へとも日数を、くらせたまふせんか
たもなくてんによはなひかせたまひ
あさからすちきりをこめさせたま
ひつゝ、たかひのこ、ろうちとけてさま
さまの御物かたりありける御さうしは
天女におほせられけるやうは我らは日
ほんあしはらくくのものにてありしか
のぞみのありてこれまでわたりて候か
なへたまは、夢はかりかたり申さんさ
りなからかなへましきとおほしめさ
は中／＼申ましきとおほせけれ
ば

「第7紙

〔絵2〕

「第8紙

天女はきこしめしなにごとなりとも
みつからににあひ申さんことならばか
なへ申まいらせんとおほせられければ
さらはかたり申さんとてこの大りにか
くれなき大事のひやうほう御坐候
よしき、をよひて候これをひとめ御
みせあれとのたまへはてん女はこれを
きこしめしそれはこれよりうしとら
にあたり七り山のおくに七たんにたん
をつき七へにしめをはりいしのくらに
こめをきこかねのはこにおさめつ、
た、よのつねのことならずしやうく
けんごのれいちにてことさら女のまい
ること中くならさることにてあり
そのこととはなり申さす大わうさ
へ御まいりあるときは三日三夜しやう
じんをしてこりをとりよのつねのこと
にてなしと仰ければ御さうしき
こしめしこ、にひとつのだとへあり
かたりてきかせ申へしせんとちきり
ておやとなる五百度ちきりてふう
ふとなるせんとちきりしおやはこの
世はかりのなさけなりゆへをいかにと
申におやのおんのふかきことしゆみ山

「第9紙

を五つほりくづしへいちになした
るよりも父のをんはふかきといふ
は、のをんはだいかいをわづかのかいにて
かへほし候事ありとも母のをんは
なをふかくわうしやうのそうとなり
候とをとにはきけともめにはみす五
百とちきりしふうふは二世までち
きるとうけたまはる一夜のまくらをな
らふるも五百しやうのゑんのみち
にて侍るそ袖のふりあはせもた
しやうのゑんときくそかし御身と
われとちきるははるく、のさうはをへ
たてたることなれともまことにぜんせ
のちきりふかきことなりなにとそあん
をめぐらし給ひてかのまき物を
ひとめみせてたへとそおほせけるてん
によはこのよしきこしめしおもふ中の
ことなればち、のふけうは一たんかうむ
るともみせはやとおほしめしらんた
いふしやうなる身をもちてまほり
かたなをもち給ひて七りみやまの
おくへおしていらせ給ひ七たんのたん
をつき七へにしめをはりいしのひつ
その中にこかねのはこにいりたるを
しめをはらりときりはらいて見た

「第10紙

まへはもんしか三なかれありこれにこ
さうのてんをうちければすなはちひ
らける天女はさんだいかくしやうに
てましませはもんじにさういはなし
りやうといふ字を三なかれかきてこ
さうのてんをうち給へは石の戸さうが
ひらけるを見たまへはこかねの箱
ありふたをひらきてみ給へはふじやうの
手にとりいそきわか御所にかへり給ふ

〔絵3〕

「第11紙

「第12紙

〔絵4〕

さて御さうしにかくと仰ければ御さ
うしきこしめしさてはしんしつの御
心さしにて待るとなめならずに
よろこひたまふことかきりなし五
つのゆひに四くはんのふてをもち三
日三夜と申にはかきうつさせた
まひける大事のひやうほうなりけ
れはかきうつしたまふあとほみな
しらかみにそなりにけるてんによ
はこれを御らんしていかに御身
き、たまへこれは大事のひようほ

「第13・14紙

うにてありしらかみになるうへは
このたいりにならずしるしあるへし
大事のなきそのさきにはやく
かへらせ給へとそおほせける

〔絵5〕

「第15紙

「第16・17紙

御さうしはきこしめし大事かいて
き御身のいのちたすからすはわれら
もともに御身のことくなるへし
さらすはてんによあしはらくへいさ
させ給へ御とも申さんとありしかは
てんによはこれをき、給ひあしはら
こくへまいることゆめくならさること
にて候名残をしみの物かたりに
このひやうほうのいとくをかたりてき
かせ申さん御身をかへし申さんにさ
ためてうつてかむくへしそのとき遠
山といふほうをおこなひうしろへなげ
させ給は、うみのおもてにしほの山か
いできてあひへた、り候へしやまを
たつねんそのひまににげのひさせた
まふへし第三のまきにらんふうび
らんふうといふほうをおこない給ふも
のならば日本の地へほとなくつかせ

「第18紙

給ふへしみつからかなにとかなりて
あるらんとおほしめされ候は、大日の
一のまきにぬれてのほうと申をおこ
なひ給ひけんざんに水をいれあ
うんといふもじをかきて見たまは、
その水にちかうかひて見え候へしそ
の時はち、の手にか、りさいごのときぞ
とおほしめし御きやうをよみとふら
ひたまへ大りに大事いてきぬその
さきにとくくかへらせ給へこ、ろなの
こさせ給ひそみつからはてぬるとも
これもぜんせのさたまりことなりぢ
やうごふすてにきはまりたりいと
ま申てさらはとててんによはうちへ
いり給ふ

「第19紙

〔絵6〕

「第20紙

さるほどに御さうしはしのひてたい
りをいてさせ給ひてかんふう川へ御
ふねをのりいたさせ給へはあんにも
たかはすだいらには火の雨ふりいか
つちなりてくらやみにこそなりに
けれ大わう大きにおとろきついで
にこしをかけ給ひてつくくとも

をあんし給ふにかのくはんきよひや
うほうをのそみにてこれまでわたり
たりしをゆるされずしてありしそや
てんによかしわさにてくはんきよに
あり所をしへてとらせたるとおもへは
たちまちに御まへにしら紙のまき
もの二三くはんふりくたりあんにも
たかはすさらはおつかげよとありしか
はあはうらせつのおにともか千人
はかりいであひてわれさきへといそ
きつ、てんくはのぼうにぶすの矢を
はめてうきくつといふ馬などにのり
おつかくる御さうしは跡を見給へはあ
むにもたかはすてんちひ、かしお
つかくるすてに御ふねまちかく見え
しかはてん女のをしへ給ひしゑん
ざんのほうをおこなひうしろへなげた
まへはへいくたりし海のおもにし
ほの山七ついできけり

「第21紙

〔絵7〕

「第23・24紙

このやまをたつぬるそのひまにまた
はや風のほうをおこなひつ、さきへ
なけ給へはにかに大風ふき、た

り四百三十日にわたりたりし海

路なれとも七十五日と申には日ほん
とさのみなとへつき給ふさるほどに
おにともは御さうしを見うしなひ
申てせんかたなくてたいりへそかへりけ
るこのよしかくと申せは大わうおほき
にはらをたて天女かくはんきよに心
をあはせたりしことうたかひなし
まことにもつましきものは女子にて
ありくはんきよにだまされ大事の
兵法をとりてやり内裏に火のあめ
ふらすることひとへにこれてんによかし
わさなれはたすけてせんなしとて
はなのやうなるてんによを八つさきに
してそすてたりけるいたはしや
てんによあしたの露ときえたまふ
むさんなるしたいかなこのてんによの
御ほんちをくはしくたつぬるに日
ほんあしはらくのさかみの国ゑの鳥
の弁才天のけしんなり御さうし
をあはれみ源氏の世になさんために
おにのたいないにやどりむまれさせ給
ひひやうほうつたへんそのためにかやう
のはうべんありしなりさるほどに
御さうしはひやうほうとらせたまひつ

「第25紙

つとさのみなとへつき給ひあふしうへ
くたり給ひてひてひらにかくとおほ
せければひてひらうけたまはりとし
もかくにも御いのちはてさせたまふ
かとあけくれこれをあんじたてまつ
りしにいま御けかう夢かうつ、かと
おもひ候へはまことやひようほうをとり
てかへらせ給へはなのめなくよろこひ
給ふことかきりなし日本をやすく
ときりとり源氏百代の世となさん
ことうたかひなしとてよろこひはかき
りなしこれほどの君はよもあらしとて
いねうかつがう申はかりはなかりけりさる
ほどに御さうしはすこしまとろませ
給へは天女枕かみにたちそひての給ふ
やう御身はなにとも心もなくわたらせ
給ふ物哉みつからは大わうの手にかゝりむ
なしく成候へとも御身ゆへのことなれば
命は露ほどもをしからず二世のち
きりはくちせしとなみたをなかさ
せ給ふと見えさせ給ひければ

「第26紙

「第27紙

〔絵8〕

「第28・29紙

御さうしかつはとおきさせ給ひいかに

やととはんとすれとも夢にてありあ
はれとおほしめしなみたをなかし
給ひあまりにふしんにおほしめし天
女のいとまこひありし時のたまひけ
ることくけんざんに水をいれ大日の
ほう一のまき物にぬれてのほうをお
こなひあうんといふもんじをかきて
みたまへはやくそくにたかはすちかひと
しづくうかひたりさてはうたかひなし
とてなけき給ふことかきりなしさて
御そうをあつめて御きやうをよみさま
くくとふらはせ給ふことかきりなし
むかしよりいまにいたるまでふうふの
中ほとにせつなきことはよもあらしかく
てひやうほうゆへに日本を思ふまゝにし
たかへてげんしの御代とこそなりに
けれ

「第30紙

(狂歌等略)

(付記)

本絵巻の調査と紹介をご許可くださったご所蔵者池谷道義氏および池谷家のみなさまに心より御礼申し上げます。また、これまでに種々のご高配を賜った齋藤真麻理氏、デジタル画像をご提供下さった松本洋幸氏、ご架蔵の伝本を拝見させてくださった石川透

氏をはじめ、ご教示・ご支援を賜った多くのみなさまにあらためて御礼申し上げます。